

非完結への勇氣

——「長崎原爆乙女」の物語と『マリアの首』——

服部 康喜

治癒を拒絶する女

原爆によって廃墟のまま放置されていた浦上天主堂の保存か、撤去かに揺れた「浦上天主堂再建計画」が、カトリック教会の意向に沿う方向（＝撤去）で収束した頃、田中千禾夫の戯曲『マリアの首』は「新人会」によって初演（一九五九・二）される。以後、その舞台であった長崎での実演は果たされないまま、千禾夫はこの世を去った。最近では一九九九年（平一一）一二月、「横浜県立青少年センターホール」において鐘下辰男演出、俳優座劇場プロデュースによる上演がなされたし、翌二〇〇〇年六月には「ベニサンピット」劇場（現代制作舎三〇周年記念公演）で上演されている。しかしいまだ長崎にこの戯曲は来ることはなかった。千禾夫の故郷、長崎は彼の『マリアの首』を疎外し続けている。その第一の要因は、作品に塗り込められた、当時の「反カトリック教会」的言説であり、第二の要因は、原爆被災者の切実な願望に挑戦するかのような作品の不敵さである。前者に関しては「浦上天主堂再建計画」をめぐる政治と宗教（カトリック）の問題として考察を試みたことがあ

るので、繰り返すことは慎もう。ここで取り上げるのは第二の要因についてである。それがいかにも当時のコンテキストから逸脱したものであるのか。まずは作品から出発しよう。

鹿 ふふふ……この私の顔、醜くふくれてゆがんだ顔、それは光

栄ある私の目的、聖なる私の自由のしるし！ それこそ人間の存在。

悪も善も、あらゆる存在の総決算をば、高く超える生命の自由のしるし！

矢張 ちがう、それこそは、あらゆる政治の総決算のしるし！

鹿 ああ！ うしなわれたあらゆる恵みのしるし！ 聖寵のしるし！

矢張 うしなわれたあらゆる正義のしるし！

鹿 正義！ 正義は私の顔をもとに返してはくれない。

矢張 正義そのものは元に返すことが出来るし、また、科学のメスは、顔の皮膚を取りかえることもできる。

鹿 そこで私の顔がまたもとに戻ったら、私が店先でたたずめば、

湯が腐ると言った八百屋の亭主も、私がおなかに入れば、

せば、含み笑いしながら逃げ出す公園のアベックも、にこにこ私を迎えてくれるだろう。

矢張 しかし、広島で散った二十万の魂は、長崎で亡びた七万の肉

は、決して再び返つてはこない。

鹿 そうだ。その悲しみと憤りとで闘うんだ。

矢張 闘う？ 何に對して。

鹿

矢張

鹿

矢張

鹿

矢張

鹿

矢張

鹿

矢張

矢張 原子の熱と光とに対して、それを弄ぶ政治に対して。

鹿 政治は、正しいか、あるいは正しくないか、常にそのどちらかしかない。正不正を究めるものもそのどちらかだ。あるいはまた時であったり、所であったり、得体の知れぬものが支配しているだけ。絶対の正義は政治にはない。存在にも無い。絶対の自由も勿論ない。

矢張 政治は進歩する。そのために闘うのだ。

鹿 闘うがいい。私は、私自身と闘う。私自身に復讐する自由をすら選ぶ。これが、原子の熱と光とに対する私の闘い。そうして私の正義！ この心の奢りがあってこそ 私は私を永らえることができる。

矢張 (半身を起して) エゴイスト、怖るべきエゴイストだ、君は、個人の力を信じてはいけない。そこには限界がある。個人を忘れねば駄目だ。

鹿 私も忘れない……忘れないのだ。あなたとは別の方向で。

しかし……ああ、マリア、私はあなたの首が欲しい！

(第二幕 第一場(坂本病院))

一読すれば明らかなように、『マリアの首』には「必然性」を拒絶する女が二名登場する。ここでは主として(鹿)に焦点を絞るが、引用の部分が証明するように彼女が拒否するのは政治という「必然性」である。一方、(矢張)は政治の全能性に固執する。それは一切の歴史的対象を政治に還元する。その意味で、政治の全能性とは絶対的とも言える政治の「必然性」を示している。したがって彼にとつて原爆は、唯一この政治という「必然性」が生み出した悲惨な物語なのである。そう言えば(矢張)という彼の名前そのもの

が、(やはり) 〓当然〓必然を連想させるものであることからも、

彼の発想の根源が何であるかが理解できるだろう。しかし、(鹿)が提起しているのは「必然性」という枠内で処理されることの拒絶である。その完璧とも言える歴史的対象に対する完結性への拒否である。実はそれは仮象に過ぎないのであって、彼女がかかる「必然性」に對置するのは「自由」という名辞である。しかもその「自由」は「私自身に復讐する」危険性を孕む、と言う。『マリアの首』の最終的なテーマは、「自由」という難解な問いに関わる(マリア)の存在自体に絞られて行くが、その行程は長い。

この(鹿)と同様の発想を持って、生に對峙するもう一人の女性に(忍)がいる。ここで深く触れる余裕はないが、彼女の発話の一部を次に引用しよう。

忍 今夜もあたしは立っている。銀行の前の荘重な大理石の、すべつこい白の大理石、なまめかしく冷たい石の柱の侍女のよう立っている。でも、しかし、スカートの下には白鞄の短刀、預かりもののこの刀、元の持主に返すべきこの刀。しのぶ、しのぶ、しのぶとはあたしの名。あの男を見たら、そうと近寄り、ぐさっ！持ち主に返すのだ。(略)目の色、顔の色、常と変わらず、何か道でも聞くように、近寄り、聞いて、まともに、肘と肘とをつけ、突いた……離れた、そしてまた道を行く。道の上の小石のように、あたしは偶然を押し殺し、無数、無限相對の道を通して、あたしはふくれ、ひろがり、あたしの実在のなかに霧のように散る。ああ！あたしはあたしの必然を、絶対を消したい……消したい、だのに、だのに、それを邪魔したもの、何物かをあたしに預け

た男、断わりなしに預け去った男、あの男が憎いのだ。

ここにも生の「必然性」を拒絶する女がいる。生の発端に位置する事象Ⅱ（あの男）Ⅱ生の支配者Ⅱ根源の「必然性」を抹殺する衝動が語る彼女たちの願いとは何なのか。それが政治であれ、人間であれ、彼女たちの生の回復を担保するものの正体を熱く問い詰める。それは「必然性」という魔術からの解放であることは間違いないだろう。しかしその前に、〈鹿〉という「治癒を拒絶する女」に立ち返ってみよう。それが時代の中で如何に逆立したものであつたかを確認しておかなければならない。彼女の悲劇的な願いはそこからしか見えないだろう。

「長崎原爆乙女」の物語の発端

一九五一年（昭二六）九月の「サンフランシスコ講和会議」において日本は主権国家として国際世界に認知される。その後、GHQによって進められてきた占領政策は解除され、日本国民が原爆の惨状を写真によって眼にしたのは翌年（一九五二）からであった。こうしてプレスコード（言論統制）によって封印されて来た原爆は、国民の前に徐々にその顔つきを明らかにし始める。同じ頃、長崎では原爆の顔つきは原爆被災者の登場によって再認識され始める。彼らはそれまで社会的には隠れていた、あるいは隠されていたのである、まずは火傷（ケロイド）に苦しむ乙女の姿で登場する。その発端は、広島流川教会谷口清牧師が設立した「ヒロシマ・ピース・センター」の救済事業Ⅱ東大清水外科での原爆乙女のケロイド治療であった。これに賛同した作家真杉静江の呼びかけによって長崎の「原爆乙女」の物語は始まる。

原爆の生にえとなつている不幸な原爆娘を何とかして治療してあげたいとかつて本紙の「人生案内」の回答者真杉静江女史は本年夏頃から各方面に奔走中であつたが、この程東大清水外科がこの治療を引き受けることになったと同女史は本社東京支社を通じて知り合いの田川長崎市長に十五日相談を依頼してきた。目下東大分院で治療を受けている広島原爆娘十余名は非常な好成績で既に一名は全快して見違えるような顔になつて再生の喜びに浸りながら帰郷し、また大阪大、大阪市大にも十二名が入院しているが、この広島原爆娘さんたちを心から世話している真杉女史は、原爆は広島だけでなく長崎にも多くの不幸な娘さんがあるはずだ、その娘達をたとえ一人でも以前の姿に帰すことは出来ないものかと念じていたもので、東大清水外科からとりあえず長崎原爆娘から三、四人を治療しようとの回答があつた。

（長崎新聞）一九五二・二・一六

広島ではすでに同年六月から「原爆娘」の治療が始まつていたが、長崎では広島のように主体的な救済活動は存在しなかつた。それは他郷の作家真杉静江の呼びかけから出発したことは記憶に留めておくべきだろう。

いま広島ピースセンターの計いで治療を受けている広島娘は十余名、既に一名は完全に治り見違えるような美しい顔に返つてゐる。この喜びの中にある広島娘はかねてから「私達だけでなく長崎の人達も」と呼び合つていたので、この切願を容れた広島ピースセンター東京支部は真杉女史の願いと共にこの程長崎娘三人までの治療費とその他一切を負担することに決まり、

十六日再び真杉女史を通じて田川長崎市長に連絡があった。

(長崎新聞)一九五二・二二・一七)

この時、田川市長は二十五万長崎市民を代表して、幹旋の労を取った真杉女史に感謝を述べると共に、広島娘の友情にも感謝しつつ、「ヒロシマ・ピース・センター」のような「原爆犠牲者の面倒を見てあげる後援団体を求め／今後は自らの手でなるだけ多くの人達を世話して上げられるよう努力していきたい」とコメントしている

(「長崎新聞」同日付、以下紙名は略)。

こうして隠れていた「原爆乙女」は発見されたのであり、この後、長崎市議会、市民団体を巻き込む原爆傷害者救援のための一大市民運動へと展開して行ったのである。少しその跡をたどってみよう。

長崎市民世論の代表である長崎市議会議員の間に原爆娘の救済強化する長崎原爆議員団結成の機運が見られ、二十二日の議会における緊急質問をかわきりに八氏を中心に二十二日午後五時から市役所第二控え室で準備協議会が開かれ、全議員に対して協力要請を実施する。原爆娘に限らず、一般原爆症被害者およびその遺家族に対する国家の救済補償を要請する。原爆総合治療所の設立など打合わせただちに市長および各議員に働きかけることになった。(同 一一・二三)

驚くべきことに、原爆傷害者は治療を含めてこの時まで、何らの救済措置さえ施されてはいなかった。その意味で「原爆乙女」の出現は、原爆傷害者救済への画期をなすものだったのである。

長崎市内の知名士婦人で組織されている「ゆかり婦人会」は二十三日郷土愛のろしを上げ、「原爆娘の救援に婦人の手を……」と推進準備にとりかかった。「ゆかり婦人会」では原

爆娘治療運動は広島ピースセンターで誠意ある努力が続けられており、今また長崎市民の間ではいまだに強力な民間の救護運動が興されていないのを気遣い、二十三日午後一時から長崎市田川市長宅に同女史らが集り、原爆娘救済運動の具体策について協議した結果、①直ちに東京、広島のピースセンターに連絡、詳細な状況を問い合わせると、もに同会を中心にピースセンター長崎支部結成に対する了解を乞う②今後、広島ピースセンターとは緊密な連絡を続行して強力な援護運動を続ける。(同 一一・二四)

このことはより広範な組織団体へと波紋を広げていく。

長崎市に組織網をもつ長崎婦人会では原爆娘をはじめ一般原爆傷害者の救済運動を協力に推進しようと二十六日古語三時から山口初子さん(同会副会長)宅に各地区代表十一名が集り、原爆娘ならびに一般原爆傷害者救済運動役員会を開き具体的対策を協議した結果、①原爆傷害者運動は原爆娘東京治療を中心に一般傷害者にまで拡げて行う②五人の選ばれた原爆娘さん達に見舞いの金一封を贈る、など運動方針を明らかにした。一月十五日から同月末まで全会員が各地区毎に街頭募金を実施するほか募金舞踏会、映画会など各種催し物を行う。また一月十五日から長崎市で開かれる「原爆の凶」展覧会に積極的に協力するなど実際運動方法を取り決めアトム主婦の力を結集して強力な救済運動にのり出すことになった。

(同 一一・二七)

一方、これらの運動と平行して「原爆乙女」は政府をも動かす起爆剤ともなりつつあった。第三次吉田内閣当時、自治および行管

担当国務大臣であった本多市郎は東大清水外科に「広島原爆娘」を訪問。「本多国務相も乗り出す／国会へも持込む／原爆娘救え“全国の話題へ”との見出しのもと、次のように語っている。

全快して幸福になれるなら気の毒な人達に出来るだけ多く、しかも早く機会を与えたいとかねがね考えていた。最近長崎の人にも加療してもらえそうだと話をき、広島のように多勢の人が治療を受けられるよう努力している。これは厚相を通じて話をしてもらった方がよいので早速山県厚相に頼んだ。

(同 一一・二二)

こうして「原爆娘」の出現は、彼女たちを超えて、原爆傷害者全体の救済へと広島・長崎市から日本へと広がりを見せようとしていた。そしてその起爆力は彼女たちのあまりにもけなげな、また悲痛な再生への祈りに込められていたと言っている。「原爆娘」の物語は日本の国民が無条件で感情移入することの出来る戦争の惨禍そのものだった。しかもその惨禍に咲く友情と再生への無垢な祈りは、同情という輪を大きく広げていったのだった。

「長崎原爆乙女」の物語の無垢性

「長崎原爆乙女」の物語が多くの感動を与えていった背景には、主人公である乙女たちの純一さ＝無垢性が大きく働いていた。原爆は彼女たちにとつてあまりにも過酷な受難であり、しかもそれぞれ的人生において長時間にわたる苦痛を強いるものだったからである。そして何よりも、彼女たちは日本の子供たちと同様、戦争の当事者責任を免れており、いわば純粋な戦争被害者と考えられていたからである。それは「広島原爆乙女」の物語と共通する基盤を構成

していた。しかし、「広島原爆乙女」の物語と比較して、唯一「長崎原爆乙女」の物語の特異性は、その非政治性にあった。このことに関して「広島原爆乙女」の物語に塗りこめられた政治性を指摘した中野和典氏の論は注目していいだろう。特に「ヒロシマ・ピース・センター」代表・谷口清牧師に率いられた乙女たちが、巢鴨刑務所に収容されたA級戦犯たちとの感動的な和解のシーンは、感動的であるがゆえに日本人同士の「和解」を優先させた政治的配慮が見え隠れする。そしてこのことを基点として、原爆投下国アメリカでの治療という、一見ヒューマンな企画の裏に、日米の「和解」という仕組まれた政治へと上昇する道筋を読み取ることはさして困難ではないだろう。

もちろん、アメリカという他者を日本の国民へと媒介するプロテスタント・キリスト者の貢献には最大の評価を下さなければならぬ。アメリカという異質な他者は幕末以来、日本のプロテスタント・キリスト者にとつては極めて身近な隣人だったのである。また、そのような広汎な社会的・人的層を米国ミッションは作り出していた。こうした歴史的な積み重ねがあつてこそ、すみやかな占領政策の受け入れと奇跡に近い短期間での戦後復興がありえた、と言つていいはずだ。にもかかわらず、日本のプロテスタント・キリスト者が、隣人ゆえに必然的に身に纏つたその政治性は、時に本質を隠蔽する危険性を生み出す。このことを確認した上で、「長崎原爆乙女」の物語には政治性が希薄であると、敢えて言おう。それは広島からの呼びかけで腰を上げたという、長崎の受動的な姿勢の産物でもあつた。そしてそのことに比例して、長崎は政治に組み込まれることから免れていたといえよう。それは純真な同情＝感動の物

語たりえたのである。そのことを少し跡付けてみよう。まず、治療への希望は「長崎原爆乙女」の登場を促した。

長大医学部調外科では今年八月市役所の調査にもとづき長崎市内の原爆被爆者二百九十名の治療を行い、実質治療とまでは行かないが、ある程度までは火傷の治療を行って感謝され、

今なお三名の重症患者は同外科の厚い看護のもとに完全治療を待っている。同外科で取扱った患者の症状は(カツコ内女子) △単純癩痕九十名(四十七名) △肥厚癩痕七十一名(三十八名) △ケロイド十二名(八名) △醜形癩痕二十七名(二十名) △運動障害五十八名(三十一名) △神経麻痺八名(五名) △異動残留二十五名(十五名) △耳奇形十四名(七名) 被害場所はいずれも浦上付近で三菱電器で被災した者が四割位に達している。年齢は十三歳から五十歳位の人達でうら若き二十代の女性性は約二割、とくに顔面に火傷をうけた女性にとつては普通人が考えられない受難の途を歩んでおり、同外科で治療を受け、なお完全に火傷の跡がとれていない某娘さんは「命が絶たれてもよい、出来るだけの大手術をしてみて下さい」と涙のうちに三日間も通い続けたという、この乙女の哀願はすべての原爆娘に共通する声であるという。

(同 一一・一八)

市社会課では一応現在長大調外科で診察、治療必要者とみなされるもの六十四名、内女性二十五名を対象に①治療効果の認められるもの②後遺症程度③年齢(婚期標準)④後遺症の位置⑤広島側提与の条件に同意するもの……。

広島乙女談：私達だけがこの恩恵にめぐまれることは心苦しい

ので、是非長崎のお友達も同時に治療して下さい、と真杉さんや協力会にお願したところ、費用の点は一切東京協力会が負担してくれることになりました。清水外科では五人居屋をあげて他の入院患者を断つて長崎乙女を待っているのです。治療は傷の内容で簡単な手術が行われますが、生まれた時のように元通りにはなりませんけれど、一年、二年かかると相当よくなりますから希望を失わないで下さい。

(同 一一・二二)

「長崎原爆乙女」の人選が始まるのはこうした経過を辿ってからである。「長崎新聞」に掲載されている彼女たちの(生の声)は、今も心を強く打つものがある。少し列記してみよう。

長崎市平戸小屋町N嬢：ふりかえりますと七年前、一閃、あの光にふれまして後は耐え難い顔面の「ひきつり」に何度か鏡の前に涙をこぼすことはあつても、若い身空で戸外にすら出ることも気はずかしい暗い生活を続けてまいりました。何事をするにもこの顔面に傷のある「私がする」という意識が手伝つてか、思うように出来ず気ばかりあせることが度々ございました。もし私が入ることが出来たら喜んで参ります。そのためには生命が多少縮まつてもと考えております。

長崎大学辻村外科研究室S嬢：思えば七年前、運命の一閃によつて希望と夢は果敢なくも消え、顔に刻まれた十字架を負つて生がいばらの道を歩まねばならないかと肉体的精神的に苦悩しつづけてまいりました。しかし今は与えられた運命に満足し、亡くなられた方たちのために祈りを捧げ仕事に身を捧げる事につとめて居りますもの、折にふれひそかに涙する事もござい

ました。この度、私達が切実に念願しておりましたことが同じ運命である広島の皆様方の温い援護によって実現しますことは只々有難くうれしく何にたとえようもございません。

(同 一一・二六)

原爆禍を顔面に深く刻み込まれた乙女たちの姿はいたいたしく、シヨールやマスク等で顔をつつみ、父兄にともなわれてこの日診察所の門をくぐったのは二十一名、長崎市内Aさん(十七)は咽喉を原爆にやられ、そのため呼吸が思うように出来ず激しく息づくのが悲哀をそゝり、調教授の質問にも満足に答えず、父親に助けられながら目一ぱいに涙を湛えた。感泣していた。また長崎市内のHさん(二十三)は浦上の旧三菱兵器で原爆に被災し顔全体に火傷を受け、このため顔全体が引きつり下方の唇は崩れ、「何故早く来なかつたのですか」の間にHさんは「どうせ直らないものとあきらめていました。今までこんな顔のため家から一步も町に出たことなく、家で洋裁などをしています」と語り、すべてをあきらめ切っていた過去を素直に語って調教授を逆に感動させていた。なお、田川市長はこの診断の結果にもとづき重症患者五名を選考する。

(一九五三・一・一一)

選考のため来診した乙女たちは、文字通り自らを隠していたのである。また隠さざるを得ないという二重の疎外状況に耐えていたと言える。この悲しい疎外の内面化に風穴を開けたのは、広島からの呼びかけであったことは繰り返して注意しておかなければならないだろう。その救済への非主体的なあり方が、彼女たちを「原爆娘」か

ら「原爆乙女」へと、逆にその無垢性を増幅させて行く。しかしその裏で、〈五名の人選〉という過酷な選別が、多くの同情・共感という心理的正当性のもとで遂行されていたことも、決して忘れてはならない事柄なのである。この人選の影で、諦めて去った乙女たちと、そもそも最初から〈治癒不能〉あるいは年齢制限(婚期標準)ゆえに来診しなかつた人たちのことも忘れるべきではないだろう。それにしても、「長崎原爆乙女」たちの苦悩はあまりにも重いやうに言えない。

「長崎原爆乙女」の旅立ち

こうしてまず三名の人選が決定されるが、再び彼女たちの(へ生の声)に耳を傾けてみよう。

西町一九五番地鳴滝高等科二年永富イク子さん(十八): だうれしくて準備も手につきません。父母も「この有難い機会にゆつくり養生して来なさい。」といつてくれますので……何十回も手術しましたがやつぱりこわい気がします。ただ期限が永引くと学校が心配です。でも一生のことです。どんなことがあつても上京したいと思ひます。

江平町三百番長大辻村外科勤務山口ミサ子さん(二十三): あまりうれしくてうそのような気がします。選考診断を受けたときもつとひどい傷に悩まされている方もあることだろうと思ひ、半ばあきらめておりましたのに……二十五年十月からせめて外科病院で働いておれば何時か治療して頂けると思つて今日までがんばつてきたのですが……父も母もない私はただ兄の「やつかい者」になるかとひがまないでもよいのに人前にも出

ませんでした。こうして皆さんのお情けで上京出来ますようになり感謝の気持ちで一杯です。

平戸小屋町二五九橋アサ子さん(二十三)：半ば諦めていただけに夢のような気がしました。……あの一瞬で家にいた(当時西浦上に居住)母と妹が死にました。東京行きがはつきりすれば墓前で母と妹にもこの喜びを知らせてやりたいと思つています。治療後今のきず跡が人様の前に出られるような結果にでもなれば御恩に報いられるような有益な仕事でも始めたいと考えております。

(同一・一五)

彼女たちの上京の光景は「行く人見送る人ただ涙／駅頭に溢れる感激／夢のせて走る雲仙号から必ず直つて帰る」／あの日の想い出も今日限り」という「長崎新聞」の感情過多とも言える「見出し」のもとで次のように報じられている。まさに過剰な感情移入こそが「長崎原爆乙女」たちへの餞の言葉だった。

打振るハンカチの波と声援に送られた長崎駅のホームを離れた原爆娘の頬は涙に濡れている「きつと直つて帰るワ」誓つた言葉が耳朶に消えやらぬうち雲仙号はやがて浦上の原爆地を走る、あの山あいの丘そしてあの川のほとり一八年前のあの日の幻想が顔面に刻み込まれたケロイド症と同じく心のすみずみまで食い入つて離れない原爆娘達は申合わせたように一瞬眼を閉じた。祈りか？ 怨みか？ 希望の首途に展開される「悪魔の修羅場と原爆娘」の現実的なコントラスト！ と見開いた橋アサ子さんの眼に雨に濡れている白い原爆中心塔、隣に身を寄せていた山口ミサ子さんは「私達が帰るころには長崎も復興して

奇麗になるでしょうネ」ポツリと語つた。

「元気で元気で行つて来い！」の声が列車の轟音を縫つて届くようだ。声をあげようとするイク子さんのノドは詰まつて声も出ない。興奮にかられた彼女がさらにデッキから身を乗出そうとしたとき、付添いの宇野社会課長は「危ない」と背後からこれを抱き止めた。送り送られる者、そば降る長崎の雨をめぐつて展開する劇的なシーン、イク子さんはデッキの通路にドツと泣きぐずれた。座席に戻つた彼女等は「施療で顔が美しくなる以上に私達は長崎市民の私達に対する今回の美しい厚意が嬉しい。上京の暁は日本最古医学の実験台に立つ覚悟で施療を続けます」とこもごも語り、東京への夢路を辿っている。

(同一・二一)

あらためて言うまでもなく、彼女たちの〈再生〉への熱い思いは純真であるだけに、読者の心を強く打つ。同時に彼女たちの〈再生〉は、長崎の〈再生〉へと重ねられていることに気づくだろう。長崎市民の感動と熱狂はその重なりの中で増幅されて行つた。

そればかりでなく、もう一つの感動が「長崎原爆乙女」たちを待つていた。深夜、広島駅に停車する「雲仙号」に「広島原爆乙女」たちが出迎えていたのだ。

二十日午後十一時二十三分東京行急行列車雲仙号が広島駅に滑りこむとわつというような乙女たちの歓声が凍てつく深夜のプラットホームに湧上つた。待望の原爆ケロイドの診療のため初めて上京する長崎原爆娘たち三人を激励しようとして広島原爆乙女たち数十名がわざわざ駅頭に出迎えたもの。思わ

ぬ歓迎に大喜びの長崎原爆乙女たちは「どんなことにも負けず明るく生きて生きましよう」と広島娘から激励の花束をうけ、さらに「これは私たちの作った歌です」と広島娘の中からだれともなく歌い出された「原爆乙女の歌」―冷たきさだめ身に負うてさびしく生きる乙女のほおより消えし微笑をふた、びいつの日返る―の歌声に、七年前の痛々しい思い出と同じ運命にたぐり寄せられた共感から「有難うございました」の声も途絶え勝のむせび泣き。広島娘もいつしか涙に濡れていた。やがて鳴りひびく列車のベルに固く手を握り合つて新生を誓う姿が居合せた人々の胸を詰まらせた。

(同 一・二二)

この「広島原爆乙女の歌」の作曲者は、巢鴨刑務所に収容されていたA級戦犯(終身刑)でキリスト者であった小林美千夫だが、そのことも現在から見れば奇異に映るはずである。

しかし、一切は感動という嵐の前に呑み込まれていたと言っている。こうして、いよいよ「長崎原爆乙女」たちは東京に到着する。そのあらたな感動の場面は、「よかった、よかった」と「感激の顔に繰り返す」田川長崎市長の涙と「白いハンカチで顔を覆う」出迎者の「忍び泣き」に「一瞬ホームに感動のシーン」が展開されることになる。そして見知らぬ人々からの「いらっしやい」「早く治つて下さい」の激励の声を受けながら宿舎に向かうことになる(一・二二)。

一方、故郷長崎では学友のための募金運動が計画されていた。

「原爆の友永富都子さんを救いましょう」鶴鳴学園高校二年の梅桜組のクラスメンバーを中心に結成された『鶴鳴学園友の会』では実践運動の第一歩として二十九日から三日間街頭に進出、原爆被害者救済募金に乗出した。この日二班に別れた

友の会メンバー約四十名は繁華街岡政デパート、本大工町長日動物園前の二カ所に陣取り、吹きすさぶ空ツ風に耳朶を赤らめながら「級友都子さんはじめ原爆被害者の皆さんを救うため御協力お願い致します」と声をからして行き交う人々に呼びかけ、アトム市民の同情を掻きたてた。特にこの美しい女学生募金は多感な同じ年頃の女学生達に共鳴を呼んだのか、学校帰りの他校の女学生達の浄金が多く、なかには「鶴鳴の皆さん頑張つて下さい」と激励して去るなどの感激のシーンも見られ原爆犠牲者救済の運動は日一日と波紋をひろげている。

(同 一・三〇)

「長崎原爆乙女」の物語の波紋と終息

「長崎原爆乙女」の登場は長崎市を基点に日本政府を巻き込む形で、原爆被害者の救済運動へと拡大するかに見えたが、さらにアメリカからも救援の手がさしのべられようとしていた。「救済運動世界の話題へ」原爆長崎へ米治療班／パールバック女史関係者を動かす」との「見出し」のもと「長崎新聞は」次のように報じていた。

本年始め真杉女史ら在京作家グループよりアメリカの作家パールバック女史に原爆被害者の治療につき協力を要請したところパールバック女史がルーズヴェルト夫人を通じて医学界および政府関係者を動かし、このほどアメリカの整形外科学会次期会長ジャンズ博士からABC(アメリカ原爆傷害委員会)所長テラー博士の許に「アメリカ整形外科学会が主なるメンバーになつて広島、長崎両市に原爆治療班を一カ年の予定で派遣したいが地元の受入態勢はどうか」との便りがあつたもので

ある。またアメリカ、ジョン・ホプキンス大学長ブロンク博士からもテラー所長あてに「原爆患者の治療募金運動が日本で権威ある団体によって行われるなら、ロックフェラー財団にたいしても寄付をあっせんするであろう」という報せもあり、テラー所長からこのことについて相談を受けた原田県医師会常任理事などは大乗気で、この温い呼びかけに応え、新春早々医師会整形学界など関係者で委員会をつくり、アメリカ治療班の受入態勢について協議することになった。なお広島市で現在までに調査したところによると原爆関係者で治療すればなおる者六十六名、ある程度なおる者三百七十三名、治療困難なる者四百五十八名となっている。(一九五二・一二・二八)

こうした広がりの中で「長崎原爆娘の歌『平和の蔭』発表会／合唱も途切れ勝ち／伝う涙に生きるの誓い」(一九五三・二・一三)の報道と「『原爆乙女の会』結成へ／長崎関係者が集り打合せ」(同五・二四)の報道が続くことになる。「長崎原爆乙女の会」については別に考察の機会をもたなければならないが、その設立の中心人物は長崎YMCA総主事青山武雄(後、長崎外国語短期大学長)であったことに触れるに留めよう。

なお、「広島原爆乙女」の物語は、「ヒロシマ・ピース・センター」代表谷口清牧師とジャーナリスト・ノーマン・カズンズの協力によって、米国での治療が実現する。それはまさに日米の「和解」の総仕上げという政治性を纏っていたことを指摘するに留めよう。それは広島と長崎の「原爆乙女」の物語の終息する姿でもあったと言える。そのことに関して、次の考察を率直に受け止める必要があるだろう。

空軍は、今では原爆乙女として知られる二十五人の少女を米国に運ぶことに同意した。国務省はこれを贖罪や損害賠償の行為として広告しないことを条件に、このミッションを妨害しないと約束した。しかし、出発が近づくにつれて、「われわれは少しいらいらしてきた」と国務次官補のウォルター・ロバートソンは後にこう認めている。「私の主な心配は、このプロジェクトが原爆の禁止に向けて世論を刺激しかねないということだ」。彼は乙女たちが「核戦争の恐怖を指摘するために国中を連れ歩かれる」ことを恐れた。(略) 国務省高官は飛行を中止するよう命じたが、その数分後に乙女たちを乗せた飛行機は米国に向けて旅立った。(略) 乙女たちの上品な物腰は、被爆者がその不幸について誰かを非難するのではなく、原爆投下を避けられないものと考えていたことを示唆していた。真珠湾を訪れた乙女たちの一人は、ヒロシマの犠牲者は「憎しみより悔恨の気持ちを持つべきだ」と主張した。非常に誤解を招きそうだが、これは広島島の再建のように、アメリカ人を安心させるものだった。(略) 翌年になると乙女たちの訪問が反核運動に油を注ぐという政府の危惧は収まった。しかし、ある歴史家は「乙女たちの『治療』は戦時の憎しみの癒しを象徴し、旧敵に対する米国の同情、慈悲心、寛大さのイメージとして投影された」と評している。これはアメリカ人に「原爆投下を悔い改める必要なしに個人的な同情を示し、代償になる満足感を経験させる」ことを許した。

広島と長崎の「原爆乙女」の物語は、こうして日米双方にとって最も都合のいい、安全な物語として完結して行ったのである。

非完結への勇氣と「長崎原爆乙女」

ここでようやく冒頭に返ることが許されるだろう。『マリアの首』に登場する「治癒を拒絶する女」Ⅱ〈鹿〉がいかに当時のコンテクストから逸脱するものであったことは、明らかだろう。そして対立的な〈矢張〉の意図も同様に明らかだろう。〈鹿〉が対峙するのは政治という「必然性」の枠組みの中で完結することの偽善性を見抜いているからなのである。それは本質的に癒されることを拒絶するのだ。非完結なままとどまること。これが彼女の誠実さなのである。この時、彼女にとつての「マリア」とは一切の人間的資格や資質という「必然性」なく、〈救い主〉の母として神に選ばれた、その「偶然」という恐怖に全身を晒し、堪え切った女性だったのである。しかし今、このことの真の意味について論じる余裕はない。この一方で、神の摂理Ⅱ神の「必然性」という見事なまでの完結性を「被爆」という現実と与えることで耐え切った永井隆の言説を対置することが課題としてあることだけは指摘しておかなければならない。

ただ非完結への勇氣と言うなら、「長崎原爆乙女の会」はその後、広島における「原水爆禁止第一回世界大会」（一九九五）を契機に

結成された「長崎原爆青年会」と合流して「長崎原爆青年乙女の会」を結成（一九五六）。さらに翌年「長崎原爆青年乙女の会」の呼びかけで「長崎原爆被害者協議会」が成立。最大の被爆者組織として「核廃絶と恒久平和」および「被爆者医療」と「差別撤退」を求めて完結することのない闘いへと歩み出している。このことの意味もまた重いと言わなければならない。

注

- 1 拙稿「ある都市の選択―田中千禾夫『マリアの首』と浦上天主堂再建計画―」（一）・（二）（「叙説」ⅢおよびⅣ 一九九一・一・六、一九九二・一・六）
- 2 中野和典『『原爆乙女』の物語』（「原爆文学研究」1 二〇〇二・八・一）
- 3 R・J・リフトン、G・ミツチエル（大塚隆訳）『アメリカの中のヒロシマ』（下）（一九九五・一二・二〇 岩波書店）

なお引用した新聞はすべて「長崎新聞」（長崎県立図書館蔵）であることを記しておく。